
幾万の真言

ちーきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幾万の真言

【Nコード】

N2269G

【作者名】

ちーきー

【あらすじ】

幾度も繰り返された感謝の言葉。その意味は一体なんなのか。

「ありがとう」

青年はその言葉を何度聞いただろうか。繰り返される感謝の言葉。泣き崩れる村人達。

村人からすれば彼は英雄であり、英雄だからこそ彼は感謝をされる。

繰り返されるその言葉を受け、彼はただただ微笑むだけだった。何も言わず、清々しいほどの青空の下を彼は歩き出した。

村のすぐ傍、神が宿る山に登る青年の顔に表情は無い。後に続く老齢の男女に見送られ、彼は歩みを止めない。

その道中、彼は考える。

幾度も聞かされた感謝の言葉を、そしてその言葉に対し、自分が言いたかった事を。

天まで届くかのような木々が生い茂るその道は、何人もの人間の歩みで踏み均されている。どれ程の人間がこの道を歩いたのだろうか、そんな事を彼は他人事のように考えた。

道中を感じる気配は動物のものだろうか。青々と茂る草木は天から与えられた恵みによるものだろうか。

時折木々の合間から見下ろせる村々には、その山と同じような実りが見て取れる。それらは全て、この山に住む神のお陰だと言う。

彼はその麓の村でそう教わって生きてきた。山の神を崇めよと、山の神を怒らせるなど。

彼はその教えを守り抜いて生きてきた。山の神よありがとう。山の神よありがとう。

それは幼少から、今に至るまで。ずっとずっと守り続け、そしてこれからも守られていく事だろう。

太陽が頭の真上に昇った頃、彼らはその場所に着いた。

山の八分目あたりまで昇っただろうか、人の手によって均された、

草木の生えぬ剥き出しの地面が広がる広場。そこには幾つもの土がまるでその下に死者が眠るかのように盛られている。

否、眠るかのようにではない。事実眠っているのだ。

ここは生贄の場。ここは今生の別れの場。長年に渡り繰り返された神への供物を捧げる祭壇。さらに頂上へ昇れば、もう穴を掘る場所が無くなった広場が無数に広がっているのだ。

盛られた土とは対を成し、深く掘られた穴が一つ。掘られたまま長くそのままだったのだろう、落ち葉や雨水でぬかるんだ穴の底。空の青すら吸い込むかのような、死の充満する穴。

「息子や……」

その穴の前で立ち尽くす青年に、今まで何も言わずに後を歩いてきた彼の母が問い掛ける。だが、それを父が止めた。

この山に生贄を連れて入る時は、見送りは血縁の者でなければならぬ。そしてその際はただの一言も口にしてはならない。

そして生贄を送り出す時は、必ず感謝の言葉で送り出さねばならない。

それがその山の周囲にある村に伝わる掟であり、そうする事でその村々は神の庇護を受けてきたのだ。

妄信的に山の神を信じた者達は、そうする事でまた生き延びられると喜んだ。たとえ悲しみがその裏にあらうとも、神を信じるその者達にとって、自らが口にする感謝の言葉は自分の心の底から漏れる言葉だった。

事実青年もそうして生きてきた。去年は隣人が、一昨年は友人がこうやって生贄に出された時も、彼は自分や村が生き延びられると感謝の言葉を向けたのだ。

無言で立ち尽くす青年。不意に自らが歩んだ道を、人生を振り返る。そこに映るのは、神を妄信した両親と自分だった。

——ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう。

声など聞こえるべくも無い遙か彼方の村から、まだそんな言葉が聞こえてくるような気がした。だがそれは幻聴だ。

——生きたい、生きたい、生きたい、生きたい。

そんなたった一つの真言は、幾万の真言に押し潰された。

その真言は呪言となり、幾万の呪言は彼の生を見捨てたのだ。

太陽が西に大きく傾いた頃、彼はやっと歩を進めた。生贄が穴に入ったならば、それを埋めるのは付添い人のする事であり、そしてその者達は次の生贄の為の穴を掘らねばならない。

それほど高くない山とは言え、それらの仕事をこなした後で日が落ちた山を年老いた両親が降りるのは危険極まりない。神を信じた者達故に逃げると言う言葉は頭に浮かばず、もう彼には両親の為に麓の村々の為に覚悟を決める事しか出来なかったのだ。

青年がすっぱりと納まるほどの穴。そこへ降りると、彼は顔を伏せた。泣き崩れる母のすすり泣く声が聞こえるが、彼はその声もその姿も見ようとしない。

——山の神よ——

何度と呟いた言葉を、彼は言えなかった。未だに神を信じているが、自分が死ぬ事はまた別の話だ。

動けぬ母の代わりに、父が土を被せる。

掟を守り何も言わずに土を被せる父。しかしその言葉の代わりに流れる涙が青年の頭や肩に落ちた。

やがて、青年の体が全く見えなくなっても、父は土を掛け続け、そして周囲の物と同じように高く土を盛った。そうする事でそこに息子が居る事を誇示するように。そうする事で山の神に自分達が生きた事を誇示するように。

「おお……！ おおおお………ッ！」

息子の墓の前で、掟を守り切れず獣のような声を出して涙を流す母。

その声を聞き、父は息子の横に穴を掘る。次の者の為の墓を掘る。幾百、幾千、幾万の感謝の呪言が蓋となり、誰もがその墓から抜け出す事が無い。

例えその下に眠る、生きたいと願う声が幾万に達しようとも、蓋をする声の一つも無くなろうとも、その墓から抜け出す者は誰一人としていないのだ。

（後書き）

話を短く纏める練習の為に作った短編です。批評をしてもらえると小躍りして喜びます。

タイトルはペルソナ4から頂きました。が、使い方が違っていていると思います。集団心理は怖いね、と言うのを感じ取ってもらえれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2269g/>

幾万の真言

2010年10月8日15時43分発行